

氏名	NGUYEN THI HOAI CHAU
学位	博士
専門分野の名称	学術
学位授与番号	博甲第 5182 号
学位授与の日付	平成 27 年 3 月 25 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則(文部科学省令)第 4 条第 1 項該当)
学位論文題目	現代ベトナム都市部における祖先祭祀の現状と展開 ーホーチミン市を事例としてー
学位論文審査委員	主査・教授 中谷 文美 教授 北村 光二 教授 藤井 和佐 准教授 高谷 幸

学位論文内容の要旨

Nguyen Thi Hoai Chau 氏が提出した学位論文「現代ベトナム都市部における祖先祭祀の現状と展開」は、ベトナムのホーチミン市における文化人類学的調査を通じて得たデータをもとに、ベトナム都市部における祖先祭祀の理念と実践に見られる特徴とその変容過程や背景要因を論じるものである。

目次は以下の通りである。

序論

第 1 章 ベトナムにおける祖先祭祀への影響要因

- 1.1 「祖先」と「祖先祭祀」
- 1.2. 祖先祭祀の成立背景
- 1.3. 儒教の受容
- 1.4. 仏教の伝来
- 1.5. 国家政策の影響

第 2 章 ベトナムの祖先祭祀の特徴

- 2.1 儒教的特徴
- 2.2 双系的特徴
- 2.3 儒教規範における「孝」原理

第 3 章 父系親族集団ゾンホ

- 3.1 ベトナムの父系親族集団ゾンホの概要
- 3.2 親族集団の相互扶助機能

第 4 章 祖先祭祀の実施方法

- 4.1 祭祀空間
- 4.2 祖先祭祀を構成する諸儀礼
- 4.3 祖先祭祀の実践から見える特徴

第 5 章 祖先祭祀と儒教的父系血縁原理

- 5.1 祖先祭祀における父系血縁原理
- 5.2 ベトナムの文化・歴史における血縁原理の重要性

5.3 儒教の生命論に基づく祖先祭祀
5.4 ベトナムの儒教式祖先祭祀のあり方
第6章 都市部における祖先祭祀の新しい形
6.1 火葬遺骨の新しい処理形式と祖先祭祀
6.2 祖先祭祀におけるサービス化の進展
6.3 オンライン墓地
6.4 儒教式の祖先祭祀における「双系化」
第7章 祖先祭祀の今後
7.1 土葬から火葬への転換
7.2 核家族化と個人主義化
7.3 父系意識の変化の背景
結論

概要としては、まず序論で、ベトナム社会において祖先祭祀が持つ社会的・文化的重要性を踏まえつつ、家族をめぐる状況や宗教観の変化を背景に、近年は祖先祭祀の実践にも新しい展開が見られることを指摘し、具体的な調査対象地の紹介を行っている。その上で、本論の目的が、儒教規範と深い関係を持つ従来からの祖先祭祀の理念と実践を明らかにした後、種々の変化の中で、祖先祭祀のどのような側面が維持され、他方でどのような側面の変容が見られるかを論じることにあると述べている。

第1章では、ベトナムと儒教文化圏である中国・韓国・日本の比較を視野に入れつつ、「祖先」「祖先祭祀」の定義、祖先祭祀の成立要因をめぐるこれまでの議論を整理した。続いてベトナムにおける儒教の受容、仏教の伝来、さらに宗教をめぐる国家政策の変遷がそれぞれベトナムの祖先祭祀の実践方法やその背景となる思想にどのような影響を及ぼしてきたかを明らかにしている。

第2章では、儒教規範に注目し、ベトナムにおいて儒教的祖先祭祀が制度化された経緯を説明すると共に、ベトナムの祖先祭祀を考えるうえで、父系血縁原理がどの程度の重要性を持つかという点を検討している。実のところ、同じ儒教文化圏に位置する他国に比べ、ベトナムの場合は、「東南アジア的」とも称される双系的特徴を備えている点がしばしば指摘されており、系譜認識においても、父系でたどる祖先と直線的に結ばれる体系よりは、子孫の側からの自己中心型の認識が強いことや、兄弟姉妹、未婚の死者、出戻りの娘など周辺の成員も祭祀の対象に含むといった側面が実際に見られる。また、女性に財産相続権が認められる場合があるほか、結婚後も実家との交流が盛んであり、実家の祭祀にも参加するといった面でも、中国や韓国の例とは対照的であるとされる。さらに、儒教のみならず、仏教や聖母祭祀など、他の宗教の影響も祖先祭祀に見ることができる。しかしその一方で、儒教規範において生前の親ばかりでなく、何代もさかのぼっての祖先にまで及ぶ「孝」の行いがベトナムにおいて重視され、父系血縁原理を基礎に置くことがベトナムの祖先祭祀の大きな特徴ともなっていることも看過できない。このように一見相反する特徴を備えたベトナムの祖先祭祀を具体的な事例を通じて検討することによって、ベトナム特有の要因を分析するとともに、現在進行しつつある変化の様相と、今後見込まれる新たな展開を明らかにすることが本論文の狙いとして示された。

このような問題意識の上に立ち、第3章では、父系親族集団ゾンホを取り上げ、親族集団内の相互扶助的関係や、祖先祭祀の実施にあたってゾンホが果たす役割を具体的に検討したほか、逆に祖先祭祀が親族を結び付ける機能を果たしていることを指摘している。続く第4章では祖先祭祀が誰によってどのような形で実施されているかということについて、家内の祭祀空間の特徴や墓のあり方について述べ、さらに祖先祭祀を構成する種々の儀礼の具体例を事例に即して説明した。

第5章は、儒教における父系血縁原理を改めて取り上げ、父系主義のもとで、家族内で娘と息子が異なる扱いを受けている現状や、祖先祭祀・血縁継承の跡継ぎとしての男児出生を重要視する傾向を具体的事例や新聞報道を通じて明らかにしている。ベトナムでは、男児選好が出生性比の大きな偏りという問題につながっており、国際的にも問題視されていることから、この点は国内でも論争の的となっていることが指摘された。このような問題を生み出すにいたった、極端なまでの父系血縁の重視は、ベトナムの歴史的経緯においてはぐくまれたものであるというのが本論文の主張である。他国に侵略される歴史の繰り返しの中で、共通の祖先を持ち「血統」を同じくするという意識を持つことが国家統一と民族団結の基盤として強調されるにいたった。そして、祖先祭祀をめぐる概念は、親族集団のレベルにとどまらず、村落と国家のレベルにまで拡張されている。この結果、父系血縁に基づくゾンホの継承、ひいては祖先祭祀を途絶えさせないために、男児出生が不可欠とみなされる一方で、婿取りという慣習は積極的に行われない。

しかし、ホーチミン市のような都市部においては、儒教式祖先祭祀のあり方も変化の途上にある。この点を具体的に取り上げたのが第6章である。もともと仏教と結びつくと言われていた火葬が普及し、墓地の形態にも変化が生じつつある。寺院の中に併設された納骨堂に収める場合は、葬儀も仏教式で行い、その後の祭祀にも仏教の関与が拡大する可能性がある。僧侶など親族集団外の人物が祭祀で重要な役割を果たすことで、祭主としての長男の役割も限定的になりつつある。公園墓地における忌祭用の場所や料理の提供、さらには墓参り代行といった新たなサービスの出現も見られ、祖先祭祀の簡略化・短縮化が進む方向にあることが指摘された。同時に、男女平等的価値観が浸透しつつある現代ベトナムにおいては、男児出生圧力への反発も広まっており、また娘しかない場合、婚出した女性であっても祖先祭祀を継承し、自宅の祭壇に生家の親を祀ることを望むケースも出てきている。このような父系原則からの逸脱の実例はまだ数としては少ないが、社会的支持を得るべく声を上げる女性たちは増えていることがこの章では報告されている。

第7章では、第6章で取り上げたさまざまな変容が生じた背景要因を分析している。まず、急速な都市化が進み、それに付随した墓地不足から、土葬から火葬への転換の動きが祖先祭祀の担い手や祭祀場所に変化をもたらし、そのことが儀礼に対する意識の変化やニーズの多様化につながったことが指摘された。また、始祖から下る父系子孫を祖先祭祀の基軸にするという考え方から、妻方や母方の親族を取り込む傾向も明らかにされた。つまり、父系子孫の義務として要請されてきた祖先祭祀が、受け継ぎやすいものが継承すればいいという都市部の生活に見合った方向に向かいつつあるといえる。同時に、核家族化、個人主義化の傾向にも拍車がかかり、葬送形態の変化は、忌祭実施の場所や供物の内容など、祖先祭祀のかたちにも新たな形式をもたらしていることが明らかにされた。

ただし、結論部では、このような変化の方向を完全に定まったものとして、父系意識の弱体化のみを強調することは早計であるとも述べ、主としてホーチミン市での調査にとどまらず、ベトナム社会内部の地域差なども考慮に入れたさらなる調査・分析の必要性を指摘している。

学位論文審査結果の要旨

NGUYEN THI HOAI CHAU 氏が提出した博士学位請求論文「現代ベトナム都市部における祖先祭祀の現状と展開—ホーチミン市を事例として」に関する学位論文審査会は、2015年1月27日(火)16時半～18時半に1号館356教室で行われた。学位論文審査委員会は、中谷文美(主査)、北村光二、藤井和佐、高谷幸の各教員で構成された。

初めに Nguyen Thi Hoai Chau 氏自身が論文の要旨を報告したのち、全般的な質疑応答を行ない、その後、個々の審査委員から論文の具体的な記述などに関する質問とコメントが出された。

まず、本論文の主題にかかわる先行研究を検討した第 2 章の記述に関し、先行研究にはベトナムの祖先祭祀に見られる双系的特徴を取り上げたものが多く、本論文が目にしたような父系血縁原理の重要性に注目した研究があまりないことの原因が何であるのかわかりにくいというコメントが複数の委員から出された。これに対しては、論文のほうでもふれているように、周辺国からの支配とそれへの抵抗を繰り返す中で、父系血縁原理を軸とする国家観や国民意識を強めてきたベトナム特有の歴史に、従来の研究が十分な注意を払ってこなかった点を指摘できるのではないかという回答があった。

また、祖先祭祀の実施にさいして、仏教やキリスト教の影響が強まっているという記述に対し、宗教としての影響力が強まっていると理解しているのか、あるいは宗教そのものの伸長とは別次元の変化ととらえるべきなのか、という問いに対しては、仏教そのものも変質し、儒教的要素を取り込んだ部分があること、ただ、端的には都市部の土地不足などを背景とする土葬から火葬への転換が、従来型の墓地ではなく納骨堂の普及をうながし、納骨堂を管理する仏教寺院の関与を強めることにつながったとの説明があった。

また、論文の後半でとくに問題としているように、男児偏重が出生性比の大きな偏りを生んでいることや、女性に対する男児出産圧力が家庭内暴力などにもつながっている点に関し、近年とくに顕著になった現象と見ていいのか、もしくは従来からあったものが可視化されたのかという質問に対しては、もともと女性が経済的に積極的な役割を果たしているにもかかわらず、父系親族集団内での継承や祭祀権を巡っては周辺的な立場に置かれてきたという事実があり、ただ、超音波診断などの技術の進展がその状況を一層加速したと考えられるとの回答があった。

このほかにも、細かい用語の選択や文章表現にわかりにくい部分があること、新聞記事の引用に基づく記述には、根拠が薄いと見られるものも含まれることなどが指摘された。しかし、全体を通じて、予備論文の審査会で指摘された問題については十分に深い考察が示され、また大量の先行研究を読みこなし、広範なインタビュー調査や参与観察に基づく事例の記述には説得力があることなどが評価された。

ベトナムの祖先祭祀に関する先行研究では、儒教とのかかわりの深さに注目し、東アジアの儒教文化圏に属する社会（中国、韓国、日本）との比較において論を進めるものが多く、本論文も基本的にはその立場を踏襲している。しかし、先行研究の多くが周辺国とは対照的な、東南アジア的特徴とされる双系的傾向や女性の活発な経済役割に注目するあまり、儒教の基本概念である父系血縁原理とそれに結びついた「孝」概念がベトナムの祖先祭祀の理念と実践に重要な意味を持つことを前景化して来なかったのに対し、本論文では、男児による継承へのこだわりが、現代ベトナムにおいて、既婚女性への男児出産圧力および出生性比の偏りという社会的問題を生み出していることを正面から取り上げている。また、女性の側からの異議申し立ての活動を紹介しつつ、祖先祭祀へのサービス業の参入や、婚家で妻方の親を祀るなどといった新しい現象が進行しつつある現状をビビッドにとらえた点で評価できる。

以上のような見解に基づき、学位論文審査委員会は、Nguyen Thi Hoai Chau 氏による学位請求論文が博士の学位に値するという判断を下した。